

# 19世紀アメリカ社会における家内労働者 —中流家庭と富裕層家庭における、その実態—

## How the Domestic Servants in Middle Class Home and Leisure Class Home Worked in Nineteenth-Century America

大塩 真夕美  
Mayumi OSHIO

*Keywords* : Domestic Servants, Leisure Class, Middle Class, Immigrants, New York City

キーワード : 家内労働者、富裕層、ミドルクラス、移民、ニューヨーク市

### はじめに

19世紀後期のニューヨークの富裕層の人々にとって、特に冬期の社交シーズンに自らの邸宅で盛大な舞踏会や晩餐会を催すことがステータスの一つであった。アスター家やヴァンダービルト家など、特にその贅沢な暮らしぶりが有名であった人々は、どれほど完璧に客人をもてなし、楽しませ、そして、自らの富をいかに上手に見せつけるかを競い合っていた。様々な催しを私宅で行う富裕層の人々にとって、必要不可欠であったのが、家内労働者だった。馬車でやってくる客人を立派な制服に身を包み出迎え、客間に案内する。そして、食事の準備ができたら、彼らをダイニングルームに案内し、誰もが不快な思いをすることがないように、配膳から食事の終わった皿の片づけまで、そつなくこなす。そして、食事の後には、婦人たちをおしゃべりの為のパーラーに、紳士たちを様々な情報交換と葉巻とお酒のためのライブラリーに案内する。そこでのさりげないサービスもすべて家内労働者の仕事であった。そのため、富裕層の人々にとって、訓練された質の良い家内労働者を自らの手元に置くことは大層重要であった。時に彼らは、わざわざヨーロッパやイギリスまで、質の良い家内労働者を探しに行ったともいう<sup>1)</sup>。

しかしながら、アメリカ人にとって、家内労働者の需要は富裕層のものに限らなかった。アメリカ南部の奴隷制に端を発し、アメリカでは、富裕層家庭のみならず、中流家庭でも以前から家内労働者を有していた。実際に、1800年から1920年の間に、家内労働者を雇う経済的余裕のある家庭では少なくとも1人の家内労働者を雇っており、その割合は全世界帯数の13%ほど、つまり8世帯に1世帯であった<sup>2)</sup>。本来、社会的階級の存在しないアメリカにおいて、「職場」などの公的空間ではなく、「家庭」という私的空間で雇用主と家内労働者という主従関係

の発生するこの制度は、大変不自然なものであった。それでもなお、アメリカには多くの家内労働者が存在した。

筆者はこれまでに19世紀のアメリカの富裕層について研究を重ねてきた。日本国内においては、富裕層研究という分野はほとんど開拓されていない。富裕層家庭に仕えた「家内労働者」研究となれば、なおさらだ。家内労働者に関する研究はイギリスにおいては比較的盛んで、ヴィクトリア時代の中流家庭や富裕層家庭における家内労働者の研究では、例えば、*The Rise and Fall of the Victorian Servant* (Pamela Horn, 2004) や *What the Butler Saw* (E. S. Turner, 1962) などがある。また、アメリカでも *Americans and Their Servants* (Daniel E. Sutherland, 1981) や *Serving Women* (Faye E. Dudden, 1983) などを筆頭に多数ある。しかし、革新主義の誘因となった社会問題やジェンダー問題として、家内労働者は看過できない集団でありながら、その研究は日本国内では例がない。今後富裕層研究を続けるにあたり、アメリカ家庭における家内労働者の存在を無視し続けることは難しい。しかし、一方で、家内労働者を研究するには富裕層家庭に働いた家内労働者だけではなく、アメリカ全体における家内労働者について知るべきであるというのもまた事実である。したがって、本稿では、19世紀以降のアメリカ家庭における家内労働者の実態を改めて考察する。19世紀の始まりから、南北戦争を経て、第一次世界大戦後の1920年までに、アメリカの中流家庭、富裕層家庭において、家内労働者とはどのような働きをしたのか、どんな人物だったのかをまずは第1章で考察する。第2章では、細かく分類された家内労働者の仕事内容を見てゆく。また、家庭という大変閉ざされた空間の中で、家内労働者と雇用主がどのような人間関係を保っていたのかもこの章で考察する。第3章では家内労働者たちの余暇について考える。

本稿は、この論考のみで何かを結論付けるものではない。この論考をさらに拡大することで、今後の筆者の富裕層家庭における家内労働者の研究、そして、その先に広がる、国内ではほとんど研究されていない富裕層家庭についての研究の種子となる論考になることを先に記しておく。

## 第1章 家内労働者たちは何者だったのか

### 1.1 なぜ、家内労働者を必要としたのか

ある若い女性が、以下のように回想している。少女はペンシルヴェニア州のある村からニューヨーク市（以下、NY市）に仕事を求めやってきた。すぐに見つかると思った仕事は見つからず、住む場所も、宿代の安い下宿に移動した。そして苦労の末、紙箱を作る仕事を得た。しかし、ある日、仕事から戻ると、下宿は火事となり、自らの少ない所持品も灰となっていた。救済施設で一夜を明かした少女は、そこを経営する婦人に今後どうすればいいかと尋ねる。

「家内労働者の仕事についてみたら？」とその婦人は言った。

少女は驚愕した。その質問自体が驚くべきものだった。のちにこう回想している。「そんな選択肢は思いもしなかったので、即座にこう言いました。『家内労働者になるつもりはありません。』それを聞いた婦人の表情は失望と嫌悪の混在したものでした。」生き残るための最後の手段を放棄したにも関わらず、少女は「はっきりとした奴隷のバッジ」をつけることを拒否したことを誇りに思っていた<sup>3)</sup>。

このエピソードからうかがい知れるのは、19世紀アメリカにおいて、家内労働者という職業が、どれほど人々から敬遠されていたかという事実だ。この理由として、家内労働者制度と奴隷制の類似点が挙げられる。19世紀アメリカには、もちろんすでに、アフリカ系アメリカ人に対する差別があった。19世紀の家内労働者の多くが住み込みで働き、労働に対する賃金だけではなく、食事、住む場所、衣服まですべて雇用主に面倒を見てもらっていたことから、使用人制度は奴隷制を連想しやすく、家内労働者というのはアフリカ系アメリカ人のする仕事であるという思い込みや先入観があった。そのため、アメリカ生まれの白人が家内労働者になることは、みっともなく、不名誉で、品のないことだと思われたという。実際に1845年のボストンの世論調査においては、家内労働者という職種は、「分類されない人口の余剰部分」と分類されていた<sup>4)</sup>。

しかし、一方で、アメリカ人は家内労働者を必要とした。その理由は以下の4つを挙げることが出来る。まず一つに、家事の大変さである。アメリカでは、一般的に大きな家に住むことが多かった。つまり、家庭内における家事もそれだけ大変であり、母一人だけでは家事は手に負えず、家事を手伝う人間が必要だった。次に、アメリカ女性に課せられた二つの役割がある。主婦としての顔と、淑女としての顔である。アメリカ人女性は、家事を完璧にこなす主婦としての役割と、慈善活動に参加するなどして社会貢献する淑女としての役割を同時にこなすことが求められた。三つ目は家内労働者を雇うというステータスを求めた点である。富裕層家庭においては、家内労働者の数が財力の証明となった。また中流家庭であっても、家内労働者を雇うだけの余裕がある、と周囲に知らせるためにも、家内労働者を1人でも雇うことがステータスとなった。最後の理由は、前の世代に倣う、というものだった。生まれ育った家庭で家内労働者を雇っていた場合、自分が独立し、家庭を持つてからの経済状況が育った家庭よりも悪かったとしても、そのまま家内労働者を雇い続けることが多かったという。特にその傾向は、南北戦争後の南部で見られた。

以上のような理由から、アメリカにおける家内労働者の数は、どんどん増えた。1800年には全米で4万人ほどだった家内労働者の数は、1860年には、約60万人、人口の約7%となった。さらに、10年後、南北戦争後の1870年には、奴隷制の廃止からアフリカ系アメリカ人家内労働者が増加し、家内労働者全体の数は100万人を超え、全人口の8%に及んだ。この多くが女性で、1870年の女性の総労働人口の約50%が家内労働者であった。この傾向は1890年まで続き、この時代を境に女性の総労働人口における家内労働者の割合が減少し始めた<sup>5)</sup>。

また、家内労働者の多くが都市部で働いていた。都市部に住む人々が裕福になるにつれ、家内労働者の必要性が増し、また都市部の人口が増加すると、ホテルやレストランなどの施設も増え、そこで働く従業員としての使用人も必要性を増した。例えば、1845年のボストンには4世帯に1人の家内労働者がおり、その数は1870年には3世帯から1.5世帯に1人の割合まで増加した。1870年時点で、NY市では4世帯に1人、フィラデルフィアでは5世帯に1人、シカゴで5世帯に1人、セントルイスでは6世帯に1人、サンフランシスコでは4世帯に1人と、地域を問わず、アメリカ全土の大都市でも同じような現象が起こった<sup>6)</sup>。ただし、デトロイトなど労働者の多くがブルーカラーであった都市では、これらの現象は起こっていなかったことから、あくまでも経済的に余裕のできた家庭でのみ、家内労働者が新たに雇われ始めたと考察できる。

## 1. 2 家内労働者の年齢構成と婚姻関係

19世紀初頭、家内労働者とは、若い未婚女性の職業であった。主に10代半ばから20代後半の女性が一般的であり、南北戦争以前には家内労働者全体の15%が15歳以下であったという。この15歳以下の子どものお大半は、孤児や非行児で、そのような子供たちは、道徳観を身に付けるという名目で、特に農村部の家庭に仕事に出された。都会に比べ、農村部は環境が穏やかで、道徳的にも良い環境であると考えられたからだ<sup>7)</sup>。19世紀末になると、義務教育制度の徹底や児童労働法の制定などにより、子供の家内労働者の数は激減し、1920年には子供の割合は4%にまで減少し、家内労働者の平均年齢は20代後半から30代前半に上昇した<sup>8)</sup>。

農村部の女性たちは、近所の家庭で家内労働者として働くことがあったが、結婚すると、より「尊敬される」職業に転職したり、主婦となったりした。ただし、これはアメリカ生まれの白人の場合であって、都市部の移民やアフリカ系アメリカ人は、結婚しても生活費のために引き続き家内労働者として働いた。1880年代から1920年にかけて、女性家内労働者における既婚者の割合は3倍となり、家内労働者全体の約23%が既婚者となった<sup>9)</sup>。これは、1900年代になると、様々な労働問題改革の結果、通いの家内労働者の割合が増えたことも一因となっている。

## 1. 3 家内労働者の人種

もともとアメリカの家内労働者は、南北戦争以前の奴隷制を除けば、地方のアメリカ生まれの白人の職業であった。しかし、その後、需要の高まりや移民の到来によって、大まかに3つの種類にわけられるようになった。アメリカ生まれの白人、移民、そしてアフリカ系アメリカ人である。

1840年くらいまで、家内労働者のほとんどはアメリカ生まれの白人であった。特に1842年に出版された当時大人気となった家内労働者のためのハンドブックが「白人家内労働者」向けに書かれたため、南部以外で働くアフリカ系アメリカ人家内労働者は私宅で雇用されることは減り、都市部のホテルなどの施設で雇用されることが増えた<sup>10)</sup>。しかし、19世紀中ごろから、

移民が激増することとなる。基本的に、移民は同じ出身国の家庭に雇われることが多かったが、以下に主な移民ごとの特性をまとめる。

#### ①アイルランド人

特にニューイングランド地方や大西洋岸に集中した。19世紀中盤で、すでにNY市の家内労働者の約4分の3はアイルランド人であった<sup>11)</sup>。その数はアフリカ系アメリカ人家内労働者の10倍になったという。しかし、アイルランド人に対しては根強い差別もあった。当時のアメリカ人にとって、アイルランド人は不衛生で、教養がなく、無作法で、不道德な存在であった<sup>12)</sup>。実際に、1853年5月の『ニューヨーク・サン』紙には、以下の広告がでた。

女性、求む一家事全般。応募者は、清潔で上品で勤勉であること。そしてもちろん気立てが良くやる気があること。イギリス人、スコットランド人、ウェールズ人、ドイツ人など、どんな国出身でも人種でもお返事します。ただし、アイルランド人はお断り<sup>13)</sup>。

このような、あからさまな差別に関しては、アイルランド人コミュニティは抗議をするも、ほとんどが受け入れられることはなかった。また、アイルランド人を雇う家庭では、アイルランド人は体が丈夫で、大変な仕事にも耐える体力があるため、仕方なく雇っているという本音があったという。ただし、アイルランド人への差別は女性に対してだけのもので、男性家内労働者への差別は特になかったようだ<sup>14)</sup>。

#### ②ドイツ人

基本的にドイツ語しか話すことができなかったため、アメリカ人の家庭には不向きだった。主にドイツ人家庭の家内労働者として活躍し、もともとドイツ人が多く移住していたインディアナ州、アイオワ州を中心とした中西部や大平原地域に多くいた<sup>15)</sup>。

#### ③中国人

太平洋岸から、ロッキー山脈以西で、1870年代以降に激増した。移民の中では最下層に位置し、肌の色も違えば、服装も奇異で、得体の知れないものを食べる人々だと思われていた。しかし、仕事の覚えは速く、一度習得すれば決して忘れず、大変勤勉であったことから重宝され、1880年代にはカリフォルニア州の家内労働者の半数以上を占めた<sup>16)</sup>。

#### ④その他

イギリス人はカナダ国境周辺、ミシガン州、ヴァーモント州、メイン州などの北東部に集中。また、南西部ではメキシコ人や先住民が家内労働者の多くを占めた。また、フラン

ス人は移民の中でも別格に扱われた。1870年の時点で家内労働者全体のたった2%、約3000人弱と大変少数で、そのほとんどが料理人として雇われていた<sup>17)</sup>。

南北戦争終結と共に、奴隷制を廃止した南部であったが、自由の身となったアフリカ系アメリカ人たちは、そのまま南部にいて仕事を待たわけではなかった。1865年に南北戦争が終結すると、アフリカ系アメリカ人は家内労働者としては一時、人気がなくなった。もともと奴隷を所有していた雇用主にとって、同じアフリカ系アメリカ人なら奴隷のほうが扱いやすく、自由になったアフリカ系アメリカ人たちをどのように扱えばいいのか悩んでいた。しかし、家内労働者＝アフリカ系アメリカ人であった南部では、白人たちは家内労働者として働くことを嫌悪した。したがって、南部では、一時、移民たちが家内労働者として雇用されることとなった。しかし、結局移民だけでは数が足りなくなり、1870年以降は、南部家内労働者の約60%がアフリカ系アメリカ人となる。1890年までには、全国のアフリカ系アメリカ人家内労働者の約75%が南部で働いていた。しかし、20世紀には、南部以外の都市部でのアフリカ系アメリカ人家内労働者数が上昇する。都市部での職業選択の自由が増え、家内労働者の数が減ったためであった。その穴を埋めるべく、多くのアフリカ系アメリカ人が都市部の家内労働者として採用された<sup>18)</sup>。

#### 1. 4 家内労働者の就職活動

19世紀から20世紀初頭にかけて多くの需要があった家内労働者だが、どのようにして家内労働者として雇用されたのか<sup>19)</sup>。19世紀初頭から全米各地に多くの職業紹介所があったが、このような組織は家内労働者に特化したものではなく、効率の良い方法ではなかった。結局、家内労働者を新たに雇いたい人々にとっては、信頼する知人や親戚から家内労働者を紹介してもらうのが、最も確実な方法であった。また、新聞での求人は、新聞の求人広告を見なければ仕事がないような人は、その時点ですでに良い家内労働者ではないという認識があったため、あまり現実的な手法ではなかった。実際、1908年のNY市のある2紙の新聞の求人欄には、合計3166件の求職に対して、257件の求人しか掲載されていなかった。

1774年、NY市に最初の、「インテリジェント・オフィス」と呼ばれる家内労働者紹介所が登場する。その後、全米の各都市にこのような紹介所が拡大するが、たいてい、どの紹介所も、小売店の店主や下宿屋の主人が、副業として店の片隅で商う場所で、仕事を求める人々にとっては、環境の良い場所ではなかった。実際、1848年のあるNY市のインテリジェント・オフィスについて、ある南部の男性は「奴隷市場のようだった<sup>20)</sup>」と指摘している。

このような状況を経て、19世紀中ごろには、政府が経営する職業紹介所である「レイバー・エクスチェンジ」が設立された。主に、港の近くに設置され、右も左もわからない移民を、悪質な業者から守り、適正な仕事を紹介することが目的であった。さまざまな職が紹介されたが、その中でも特に多かったのが家内労働者で、1860年代には2万5千人の家内労働者がレイ

バー・エクスチェンジを介して雇用主に紹介された。ヨーロッパから船で東海岸に到着する移民たち、とくにアイルランド人は、船から降りるとすぐに、仕事を見つけることができたとの指摘もある<sup>21)</sup>。

そのほかにも、教会後援の紹介所もあった。これは、主に家内労働者の搾取を失くすべく設立されたものであった。また、より良い条件を提示するなどして家内労働者を引き抜くこともあったが、これは、その後の前雇用主と家内労働者の関係はもとより、前雇用主と自らの友好関係を壊す犠牲があったため、稀であったという。

## 第2章 家内労働者としての仕事

### 2.1 家内労働者の種類

19世紀以降の大抵の中流家庭では、一人の家内労働者を雇って、すべての家事を任せていた。しかし、富裕層家庭では、多くの家内労働者が働き、雇用主と日頃から顔を合わせ、客人とも顔を合わせる「上級家内労働者」と、基本的に屋敷の表舞台にでることはなく、地下の家内労働者専用のスペースで肉体労働をこなす「下級家内労働者」の二種に分かれていた。そして、このような複数の家内労働者が働く職場では、アフリカ系アメリカ人と白人が共存することはほとんどなかった。これには、白人がアフリカ系アメリカ人と働くことを嫌がった側面と、万が一、共同で働く場合には白人はアフリカ系アメリカ人とは別の休憩所や台所を要求したため、使用人スペースを別々に用意する必要があったためだった<sup>22)</sup>。

行うべき仕事の内容によって、それぞれの家内労働者には役職名がついており、日々、自分に課せられた仕事を追行するのが、おのおのの役目であった。以下にそれぞれの役職名と仕事の内容をまとめる<sup>23)</sup>。

#### ①女中頭 (housekeeper)

女中頭は、執事と共に、使用人の最高位として仕事を全うした。使用人一人一人が、きちんと仕事をしているか、家庭の支出は予定通り行われているかなど、その家庭があるべき姿になるよう、総合的に家庭を管理する役割だった。雇用主や夫人とも密接な関係を必要とした。

#### ②執事 (butler)

女性家内労働者のトップが女中頭なら、男性家内労働者のトップは執事であった。そして執事は、その家庭の威厳を自らの姿勢によって保つという責任があった。上級家内労働者のしつけと管理、雇用主に見える部分の家事に対するすべての責任を負った。また、陶器、銀器、ガラス器、酒類など貴重な品々の管理を、台所にある貯蔵庫とは別の、「執事のパントリー」と呼ばれる厳重にかぎの掛かった貯蔵庫で行った。また、イギリス人の執

事は最高であると思われていた<sup>24)</sup>。

### ③従僕 (footman)

執事の右腕であり、雇用主である一家の主人に常に付き添う人物であった。主人が起床するまでに、玄関の掃き掃除や部屋女中の手伝いをし、朝食のテーブルの準備をした。朝食の間は、家族に付き添い、給仕から片づけをこなした。日中は、客の出迎え、お遣いなど、文字通り、足を動かして仕事をする役目だった。身長は高ければ高いほどよく、白いストッキングを着用することが一般的だったため、ふくらはぎの形の美しさが採用基準であったともいわれている<sup>25)</sup>。

### ④従者 (valet)

従者は主人の身の回りの世話をする人物だった。洋服や小物を管理し、旅行の際には荷物造った。主人が個人空間で快適に過ごせるよう常に配慮するのが仕事だったため、側近として男主人の秘密の交友やアリバイ作りなど、徹底して男主人のために働く役目を担っていた。

### ⑤侍女 (lady's maid)

従者の女性版であり、女主人の身の回りの世話をした。髪結いから、洋服の修繕や製作も仕事のうちであった。洋服やジュエリーなど、女性が身に付ける物はすべて管理をした。また、女性が社交に出かける際には同行することもあり、同行しない場合には、帰宅まで待機した。特に女主人のファッションに全て責任を負うところから、フランス人が好まれた。

### ⑥居間女中 (parlor maid)

家族の個室以外の部屋、つまり、客間やダイニングなどの掃除や管理をする女中で、これらの部屋の掃除は、朝、家族が起きてくるまでにすべて終わらせた。イギリス人が適任だと思われていたが、適任者を見つけることは困難で、結局アイルランド人に落ちつくことが多かった<sup>26)</sup>。

### ⑦部屋女中 (chamber maid)

個室の部屋担当の女中。その部屋の主人が起床するタイミングでカーテンと窓を開け、主人がベッドを去ったら、ベッドを整え、部屋を出ると、部屋の掃除をする。家族が夕食をとっている間に、部屋に入り、今度は就寝のために部屋を整える。侍女や従者が雇用主自身に使えるのに対し、部屋女中は雇用主の部屋への責任を持つ役職であった。

### ⑧子守 (nurse)

子どものいる家庭には必須の存在で、採用の際には、雇用主が最も厳しく審査した。子供にとっての子守は、女主人にとっての侍女で、実際に、子供たちの多くは、両親と過ごす時間よりも、子守と過ごす時間の方が多かった。

ここまでが上級家内労働者である。基本的に屋敷の中でも、人目に触れる部分で働き、主人と顔を合わせることが日常であった。以下は、家族の目に触れない場所で働く下級家内労働者について詳述する。

### ⑨洗濯係 (laundress)

一日中、洗濯をして、アイロンをかける。外見の良さも採用基準となる上級家内労働者と違い、下級家内労働者の外見は考慮されないが、洗濯係は、強靱な背中と力強い腕を持つ女性が採用された。家内労働者の中でも、最も体力の要求される仕事である一方で、素材に合った洗濯方法や、洗剤の知識なども兼ね備えた。

### ⑩料理人 (cook / chef)

通常、富裕層家庭では料理人はコックではなく、シェフと呼ばれ、フランスから腕の良い男性がリクルートされた。家庭によっては、シェフは普段の食事は作らずに、晩餐会や特別の催しだけに腕を振るう場合もあった。その場合には、普段の家族の食事は台所女中の仕事となった。

### ⑪台所女中 (kitchen maid)

シェフ、あるいはコックのアシスタント。食材の下ごしらえや、調理器具の管理と準備、家内労働者用の居間などの管理を行った。多くの富裕層家庭では、家内労働者たちの食事を用意するのは、台所女中の仕事であった。

### ⑫洗い場係 (scullery maid)

全家内労働者の中で、最も過酷で、最も立場が弱く、賃金も安かった。台所の皿洗い、鍋磨き、ゴミ出し、台所の掃除すべてを担当。この職から台所女中になるだけでも、立派な出世であった。

また、1840年代になると、NY市では、富裕層家庭で働く制服姿の家内労働者がみられるようになった<sup>27)</sup>。特に上級家内労働者にヨーロッパの宮廷を模した制服を着せることで、客人が訪問した際に、その家自体に威厳を与えることができた。特にそれが顕著となったのは、1880年代以降で、当時のNY社交界で頂点を争ったアスター家とヴァンダービルト家は、あ

らゆる点において、財力の見せびらかしを競ったが、家内労働者に着せる制服も両家でこだわりを見せあった。一目見て、どちらの家庭の家内労働者かわかるよう、アスター家の上級家内労働者は青い制服、ヴァンダービルト家の上級家内労働者はエビ茶色の制服に身を包み、客をもてなした<sup>28)</sup>。

上記のように、富裕層家庭には大変数多くの家内労働者が働いた。仕事は細かく管理され、どの家庭も同じような苦労があった一方で、誰もが名前を知るような富裕層家庭に仕えることは、大変名誉なことであった。自ら雇用主の名前をアピールして、家内労働者としての技術の高さを自慢することもあった。また、正式に雇用されていなくても、例えば大規模な晩餐会の際などに、臨時要員として一時的に雇用されただけの皿洗い要員でさえ、それは彼女の経歴に花を添えたし、人々に自慢できるものであったという<sup>29)</sup>。また、富裕層家庭においては、前述のように、ヨーロッパの熟練の家内労働者を雇い入れることもあった。そのため、家内労働者自身が、すでに自らに誇りを持っており、雇用主を査定しているような姿勢も見られた。実際に、彼らの目には、昔からの由緒正しき家系である伝統派と、血筋を持たず財力しかない新興成金の区別は明らかであった。あるフランス人執事は「新興成金にはエチケットや優雅さがない。豪華絢爛な城の中で、豚のように生活している。まるで、シンシナティの農夫だ」と自らの雇用主を裏で笑っていた<sup>30)</sup>。

男性家内労働者は多くが上級家内労働者として働き、女性に比べ待遇も良く、雇主にとってのステータスシンボルであった。

このように、富裕層家庭では、様々な種類の家内労働者が大勢働いていたが、彼らの生活は細かい規律に縛られ、非常に窮屈なものであった。ほとんどの家内労働者が、主人の紹介状なしには、地元の図書館から本さえ借りることさえできなかった。通常、執事と料理長のみが、結婚して家庭をもつことを許されており、女中頭は、通常、未亡人や年配の独身女性の職業であった<sup>31)</sup>。

## 2.2 雇用主との関係

雇用主にとって、見ず知らずの他人を家内労働者として家庭に招き入れることは冒険であった。そのため、富裕層の邸宅は、家内労働者と主人たちが顔を合わさずとも十分生活ができるよう、邸宅の端に家内労働者専用の棟を造る工夫がされていた。家内労働者専用の棟には、キッチン、パントリー、洗濯室、食器部屋、家内労働者専用のダイニングルームなどから成る共用部分と、男女別の寝室があった。寝室は基本的に屋根裏か地下に位置し、共同の場合もあれば、個室の場合もあった。地下であれ屋根裏であれ、十分に日の入る窓や、暖房設備、水道設備はなかった。執事と女中頭にはそれぞれ専用の個室があてがわれた<sup>32)</sup>。

主人や客人が使う表玄関は、威厳があり立派なものであったが、家内労働者たちは、裏口の専用の入り口からのみ出入りを許された。主人たちが使う毛足の長い絨毯が敷き詰められた階段を使うことなく、家内労働者たちは絨毯も灯もない裏階段を使った。また、各部屋のドアは

白いペンキで美しく塗装され、クリスタルの取手がついていたが、その裏側、つまり家内労働者たちが日々目にする扉の裏側は緑のフェルト地が貼られ、簡素な取手がついていた<sup>33)</sup>。

邸宅が大きければ大きいほど、家内労働者の数も多かったため、家内労働者用の棟の規模も大きくなった。例えば、19世紀のNY社交界の人々の避暑地であったニューポートでヴァンダービルト家が所有するブリーカーズと呼ばれる別荘があった。これはニューポートで最も豪華で、最も大きい豪邸であり、建物全体で70の部屋があったが、そのうちの30部屋は家内労働者棟にある部屋だった。また、ヴァンダービルト家がノース・カロライナ州の広大な手つかずの自然の中に建設した豪邸ビルトモアには、敷地正面からは目隠しとなるように、木々で覆われた家内労働者用の別棟が建設されていた<sup>34)</sup>。

雇用主にとって、家内労働者を雇うことは、服装や習慣、食べ物、言葉など、全てが自分たちとは違う「異星人」と接するようであった。これは、移民を雇い入れることに限らず、例えば、富裕層家庭が労働者階級のアメリカ人に対しても、中流家庭がアフリカ系アメリカ人に対しても抱いた感情である。基本的に自らと同じ環境に生まれ育った人物が家内労働者になることはないため、どんな人物を招き入れたとしても、文化差異による戸惑いや誤解はあったことが感じられる。もともと、自分と家内労働者は違う生物だと認識しているため、家内労働者に対する雇用主の態度にはいくつかのパターンが見受けられた。最も一般的であったのが、特に明確な理由はないけれど、本能的に階層を意識し、結果的に、差別をする人々であった。彼らの多くは、社会的にも知的にも、家内労働者より優れている自分が、アメリカのキリスト教的道徳観や価値観を家内労働者に教えてあげるのが、自らの使命だと思っていた<sup>35)</sup>。実際に、家内労働者の多くに移民を抱える都市部のホテルでは、「アメリカ化プログラム」と呼ばれる研修が行われることもあった<sup>36)</sup>。しかし、一部には、家内労働者になるような人物をもとから邪悪な存在であると認識し、厳しい規律や指導で、徹底的に抑圧する雇用主もいたという<sup>37)</sup>。

家内労働者の知的レベルの実態と言えば、1890年の時点で、女性家内労働者の23%、男性家内労働者の19%が読み書きができなかった。これは彼らの生育環境など様々な理由により、正式な教育を受けることができなかったことに起因する。この理由を裏付けるかのように、家内労働者の中でも、アメリカ生まれの白人家内労働者の識字率は高かった<sup>38)</sup>。

基本的に、雇用主と家内労働者は、別の存在であるという意識が存在したため、家庭内では、上級家内労働者であっても、主人たちに話しかけられない限り、自分から口を開くことは許されず、家内労働者同士でも、主人の前ではおしゃべりは厳禁であった。工作中に、廊下などでその家の人間とすれ違うことになった時には、壁に向かい、決して顔を合わせないよう指導されている場合もあったという<sup>39)</sup>。屋敷の外でも、このルールは存在し、外で顔を合わせることがないよう、雇用主が行くような場所には、家内労働者は足を運ばないし、万が一、外で顔を合わせる場面があっても、互いに気が付かないふりをした<sup>40)</sup>。しかし、中には、大変良好な関係を保っている雇用主と家内労働者もあった。特に中流家庭においては、一つ家庭に、数世代に渡りお仕えする家内労働者もいたし、その職場をなんらかの理由で離れても、お

互いに手紙のやり取りなどで連絡を取り続ける関係もあった。

また、19世紀後期の富裕層家庭においては、家内労働者とは、富裕層の家庭に欠くことのできない、「自らの趣向と地位のシンボル<sup>41)</sup>」であった。熟練の家内労働者を十分な人数雇い続けることができるのは、雇用主本人の財力と人間力の証明になると考えられていたため、家内労働者たちに対する態度にも十分に注意が払われ、客人のいる前で家内労働者を叱責することはタブーであった。人前で恥をかかせることは、特に上級家内労働者にとって、最も恥ずべきものであって、家内労働者の威厳を保つことは大変重要であった<sup>42)</sup>。

中流家庭同様、富裕層家庭においても、一部の家内労働者は長年一つの家庭に留まることもあった。しかしこれは、中流家庭の使用人に見られた、愛着や仕事に対する誠意からではなく、富裕層であるからこそ、十分な賃金や、しっかりとした労働環境ゆえであった。

### 第3章 余暇と娯楽

#### 3. 1 家内労働者と罪

家内労働者の道德観は、雇用主にとって、大変気になる点だった。特に問題視されたのが、家内労働者による窃盗である。基本的に、家内労働者の賃金はその他の職業と比べても、同等かそれ以上の金額であった<sup>43)</sup>。むしろ、住み込みという点で、衣食住が保証されていることを考えると、手元に残る金額は、当時の労働者の中でも高いほうであったといえる。その点から、家内労働者による盗難は、お金に困った末の切実な犯罪というよりも、雇用主による必要以上の監視や説教への報復として行われることが多かったという<sup>44)</sup>。中流家庭においては、台所は雇用主の目が届かない場所であったため、多くの盗難は台所で発生した。富裕層家庭では、基本的に高価な食器などは、「執事のパントリー」に大変厳重に保管されていたため、台所での窃盗は少なかった一方で、美しいもの高価なものに目がくらんで、雇用主の身の回りの物を盗むことがあった。例えば、1859年、あるアイルランド人の家内労働者が盗みの罪に問われた。彼女は「酒に酔って、奥方様のクローゼットに入り、自由に行動してしまいました<sup>45)</sup>」と罪を告白した。

盗みとは別に、雇用主そして社会全体から大変心配されたのが、家内労働者の性的道德観の欠如であった。若い女性家内労働者たちにとって、少ない賃金の中で、美しいドレスやおしゃれのためにお金を使うことは、数少ない楽しみの一つだった。お金には限りがあるが、周囲には美しいものがあふれている。その状況下で、売春は、拘束時間も短く、より多くのお金が稼げると、気楽な気持ちで転職する女性たちも多かった<sup>46)</sup>。インテリジェンス・オフィスの一部では、売春宿のオーナーが、仕事を求めやってきた若い女性たちをリクルートしている光景も見られたという<sup>47)</sup>。実際に、1850年代から1920年代にかけて、労働者における性病歴のある割合は、家内労働者が最も多く、売春婦の以前の職業でも、家内労働者を挙げる者が最も多かった<sup>48)</sup>。

### 3. 2 趣味と娯楽

19世紀から20世紀初頭にかけて、多くの若い女性たちが、また時には男性たちもが都市部で家内労働者になることを好んだ。貧しい農村部のアメリカ人は刺激にあふれた都会で働くことを望み、家内労働者は、都会に出て最も簡単に見つけることが出来る仕事であった。ヨーロッパから仕事を求めてアメリカにやってきた移民たちは、港で彼らに仕事を斡旋しようと待ち受けている人々によって、家内労働者という職業を紹介された。実際に都市部には、田舎にはない娯楽や楽しみがあり、若者は特にそのようなきらびやかさに目を奪われたが、多くの家内労働者たちにとって、その楽しみを楽しむ時間的余裕はあまりなかった。実際、彼らは月曜日から土曜は朝から晩まで働いた。食事の時間も「休憩時間」と換算されたので、実際に息つく暇はほとんどなかった。日曜日には半休がもらえたので教会には行くことができた。また、週1回、夜のお暇がもらえたが、丸一日休暇がもらえたのは月に1回だったという<sup>49)</sup>。

この状況では、都市部で働く家内労働者たちにとって、街に繰り出して余暇を楽しむことは現実的ではなかった。結局、家内労働者たちに人気の娯楽は編み物をすることや、雑誌や気楽な小説を読むことであった。また、屋敷の裏庭で洗濯物を干しながら、同僚とおしゃべりをしたり、市場や教会で、他の職場で働く顔見知りとおしゃべりすることも立派な娯楽であった<sup>50)</sup>。

職場の同僚たちとは、基本的に家内労働者専用台所とそれにつながるダイニングルームでの交流が主であった。時には、全ての仕事が終わった夜に家内労働者たちのパーティーがおこなわれることがあった。そのため、職場での恋愛は一般的で、その現実を知っている女性の中には、男性が雇われていない職場では働かないという者もいた<sup>51)</sup>。

当時の家内労働者たちは、賃金の中でも、服飾代にける割合が多いことを知られていて、休日に外出する際には、「家内労働者などではなく、その家の主人かと思われるほどのレディに見えた<sup>52)</sup>」と指摘されている。通常1着のドレスを作るには1か月分の給料にあたる2ドルほどの金額が必要だったが、中には、年間8枚のドレスを新調した者もあった<sup>53)</sup>。労働者層の若い女性たちは、美しいドレスに身を包み、素敵に髪形を整えてお洒落をすることが「レディになること」であると考えていて、そのような格好をすれば、街の紳士に見初められると思っていた子も中にはいたという。家内労働者が良いドレスを着ていることは、そのように上品な服を選ぶよう教育した主人のステータスが上がる一方で、素敵なドレスを着ることで、自らも社会的地位を上げたつもりになり、主従関係が弱まるという矛盾も抱えた<sup>54)</sup>。

### おわりに

20世紀になると、アメリカの邸宅はよりコンパクトになり、家電製品の普及により、家事の機会化が進み、家内労働者の必要性は徐々に減った。その結果、総労働人口における家内労働者の割合は1920年には4.5%まで減少、16世帯に一人しか家内労働者がいない計算となった。また、様々な労働法の制定により、結果的に労働時間の長くなる住み込み家内労働者の数

は激変し、特に中流家庭においては、通いの家内労働者を置くことが一般的となった<sup>55)</sup>。また、1870年以降は、家内労働者の労働環境の向上を訴え、多くの改革団体や組合が組織された。それらの団体の活動の末、実際に、いくつかの家内労働者の地位を向上させるような法律も制定された。

19世紀から20世紀にかけて、家内労働者はアメリカの中流家庭、富裕層家庭において、必要不可欠な存在であった。農村部の白人女性、移民、アフリカ系アメリカ人と様々な背景を持つ女性、そして時には男性が、他人の家の中で生活をしながら労働をするという稀有な体験をしていた。工場や店で働くのとは違い、基本的に住み込みで働くことが条件となる家内労働者としての生活は、大変骨の折れるもので、夜遅くまで働き寝室に戻るときには、すっかりくたくたで、家族への手紙や日記を書く気力もなかったことは、現存する家内労働者たちの日記や手紙が少ないことからもうかがえる。また、階級制度により身分がはっきりしているヨーロッパと違い、本来、人は平等であり自由な存在であるはずのアメリカにおいて、雇用主の監視と教育の下で働く家内労働者たちは、特に南部における奴隷制という歴史も相まって、家内労働者にしかなることができない境遇の人間が就く職業だと、人々から見下された。工場や店での仕事と違い、家内労働者たちは、その家の名前を背負って仕事をし、生活をした。その点で、彼らの生活は、貴重な自由時間でさえも、雇用主のものであり、それゆえに、余計、アメリカ的ではない仕事と人々から見下されたのである。

以上のように、今後の富裕層研究及び、そこにおける家内労働者研究を今後さらに発展させる前提の下、アメリカにおける家内労働者の概要をみてきた。これまでも研究してきた富裕層家庭における家内労働者だけでなく、中流家庭での家内労働者の状況も知ることができたのは大きな前進である。ひとえに家内労働者とは言っても、中流家庭と富裕層家庭では、その扱いは大きく異なり、彼らの自尊心も違った。富裕層家庭に雇われることは、それだけで、他の使用人とは一線を画す存在であった。また、使用人の労働状況を巡っては様々な問題が生じていたが、これは、組合や労働改革団体が組織作られた1870年代以降に大きく変化をしていくことも明らかになった。

それらを踏まえて、今後の課題として、1870年代以降の家内労働者を巡る労働問題の動きを引き続き調査することは、彼らの労働実態を探る上で大変重要である。また、映画や小説などのポピュラーカルチャーには、家内労働者はどのように描かれてきたのか、という点も研究されるべきである。家内労働者がどのように表象されてきたのかを研究することは、アメリカ社会が、どのように家内労働者を認識していたのかをひも解くカギになるであろう。今後は、本稿であぶりだされた疑問を一つ一つ研究していくことで、日本国内における富裕層研究の道をさらに開拓していきたい。

## 【注】

- 1) Sutherland, Daniel E. *Americans and Their Servants: Domestic Service in the United States from 1800 to 1920*. Baton Rouge, LA: Louisiana State University Press, 1981. p.108.
- 2) *Ibid.*, p. 10.
- 3) Richardson, Dorothy. "The Long day", *Women at Work*. William L. O'Neil ed. New York: Quadrangle Books, 1972. pp. 3-57. 本稿における日本語訳は全て筆者による。
- 4) Sutherland, pp. 5-6.
- 5) *Ibid.*, pp. 45-47.
- 6) Shattuck, Lemuel. *Report to the Committee of the City Council Appointed to Obtain the Census of Boston for the Year 1845*. Boston: n. p., 1846. p. 84.
- 7) Weston, Richard. *A Visit to the United States and Canada*. Edinburgh, UK: Richard Weston and Sons, 1836. p. 204.
- 8) Sutherland, pp. 59-60.
- 9) *Ibid.*, p. 55.
- 10) *Ibid.*, p. 48.
- 11) Stansell, Christine. *City of Women: Sex and Class in New York 1789-1860*. Chicago, IL: University of Illinois Press, 1987. p. 156.
- 12) Sutherland, p. 40.
- 13) *Irish-American*, May 28, 1853. Cited in Anbinder, Tyler. *Five Points: The 19th-Century New York City Neighborhood That Invented Tap Dance, Stole Elections, and Became the World's Most Notorious Slum*. New York: The Free Press, 2001. p. 128.
- 14) O'Leary, Elizabeth L. *At Beck and Call: The Representation of Domestic Service in Nineteenth-Century American Painting*. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press, 1996. p. 114
- 15) Stansell, p. 156.
- 16) Sutherland, p. 39.
- 17) *Ibid.*, p. 57.
- 18) *Ibid.*, pp. 57-59.
- 19) 家内労働者の求職に関しては、Sutherland、16頁～22頁を参照。
- 20) Foster, George S. *New York in Slices: By an Experienced Carver*. New York: W. F. Burgess, 1849. pp. 37-40.
- 21) Stansell, p. 155.
- 22) Sutherland, pp. 83-84.
- 23) 家内労働者の種類の詳細は、King, Greg. *A Season of Splendor: The Court of Mrs. Astor's Gilded Age New York*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons, Inc., 2009、197頁～203頁、Sutherland、89頁～94頁を参照。
- 24) Sherwood, Elizabeth. *Manners and Social Usages*. New York: Harper and Brothers, 1887. p. 285.
- 25) ホーン、パメラ 『ヴィクトリアン・サーヴァント：階下の世界』 子安雅博訳、英宝社、2005年、64頁。
- 26) Sherwood, p. 268.
- 27) Dudden, Faye E. *Serving Women: Household Service in Nineteenth-Century America*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1983. p. 109.
- 28) Sutherland, p. 129.
- 29) *Ibid.*, p. 86.
- 30) *Ibid.*
- 31) King, p. 205.
- 32) O'Leary, 166.

- 33) ホーン、183頁。
- 34) O'Leary, p. 166.
- 35) Stansell, p. 163.
- 36) Sutherland, p. 38.
- 37) *Ibid.*, p. 27.
- 38) *Ibid.*, pp. 63-64.
- 39) O'Leary, p. 167.
- 40) Sutherland, p. 29.
- 41) King, p. 195.
- 42) Dudden, pp. 125-126., King, p. 195., Sherwood, p. 268.
- 43) Sutherland, p. 109.
- 44) *Ibid.*, pp. 67-70.
- 45) Anbinder, p. 127.
- 46) *Ibid.*, p. 217.
- 47) Stansell, p. 167.
- 48) Sutherland, p. 70.
- 49) King, p. 207.
- 50) Sutherland, p. 78.
- 51) *Ibid.*, p. 76.
- 52) O'Leary, p. 169.
- 53) Stansell, p. 164.
- 54) *Ibid.*, p. 164.
- 55) Sutherland, p. 183.

(令和1年11月28日受理)